

「教育実習体験レポート」

[公立中学校 国語]

今回私は、母校の公立中学校で3週間教育実習を行った。一週目は体育大会と授業見学、二週目から実際に授業をした。二年生の授業を担当しており、授業数は国語が4クラス×8回、担当クラス(二年生)の学活が3回だった。今回の実習で学んだことは大きく分けて四つある。教師という職業の大変さ、授業をする難しさ、生徒と接すること・生活面での指導することの難しさ、教師という仕事のやりがいの四つだ。

まずは授業をする難しさについて書く。授業範囲は、詩、古文、和歌の三つだった。一番最初に思ったことは、予定通りに行くことがまずないということだ。授業をするだけで、何度もトラブルに遭遇した。パワーポイントが映らない、教室に虫が出て授業が中断される、授業に必要なものを忘れる、授業中に生徒が喧嘩する等である。授業見学の際には、生徒が教室を飛び出す場面もよく見られた。このように授業をする中で想定外の問題が多々見られたため、授業を作る際には少し余裕を持った時間配分が必要だと感じた。また同じ授業内容でもクラスによって進度が全然違うことも難しい問題の一つであった。発表や発言・グループワークが得意なクラス、真面目だが発表などは苦手でグループワークが思うように進まないクラス、授業中の私語が非常に多いクラス、そもそも学習することを放棄している人が多いクラスとクラス毎に様々な特徴があったため、同じ授業内容でも進度が同じになることはなかった。しかし、限られた時間の中で同じ量の知識を生徒に与えないといけないという絶対条件があることが非常に難しい点であった。この場合は、授業の進みが早いクラスでは、グループワークや発言の機会を多くしたり、雑談を交えた授業をすることで、他のクラスとの進度を合わせた。そのため授業を作る際は、一番授業が進むスピードが遅いクラスに合わせて、早く進むクラス用に余った時間にするのを考えておくのがベストだと感じた。私の担当教科が国語ということもあり、他の教科より寝る生徒が多いという問題もある。そのため、少しでも生徒が寝ないような工夫もした。例えば、授業中に生徒に発言させる機会を増やしたり、雑談を交えてみたりである。特に効果的だと感じたのは、授業の前半に書く作業を増やし、後半にグループワークや発言する機会を増やすことである。またそのことを生徒に伝えることで、生徒は50分間起きておくのは現状耐えられないから寝るという思考にはならず、書く時間はあと少しだからとりあえず頑張るという姿勢で授業を受けてくれた。このことによって授業中に寝てしまう生徒が減っていった。さらに今回は生徒に親しみにくい古文がメインの授業であったため、できるだけフランクな話し言葉で古文に対する苦手意識を減らしてもらおうと考えていたが、国語の先生というしっかりとした言葉遣いが必要な教科でもあるため、そのバランスが非常に難しいと感じた。

次に生徒指導、生徒との関わりの難しさについて書く。中学二年生という非常に難しい時

期であることから、生徒と接することが非常に難しいと感じた。まず特別対応をしなければならぬ生徒について疑問を感じた。もちろん不登校気味だから、少しでも生徒の気持ちに寄り添い学校に来てほしいという学校側、教師側の意見もわかる。しかし、その対応をすることによって、他の生徒が不満を抱くことは確かで、普段から真面目に頑張っている生徒に悪影響を与えてしまう可能性があることもあると感じた。さらに、その不満を持った真面目に頑張っている生徒に対して、どのように不満を少しでも解消するかを考えることも必要だと感じた。

また三週間では感じ取れなかったが、経験上、特別対応をされる生徒は真面目に頑張っている生徒と関係性が悪くなってしまうことがよくある。その面を考えると特別対応は、元々不登校気味の生徒が学校に居づらくなってしまいう状況を加速させてしまうことがあるため、本当に注意が必要だと感じる。また特別対応により、他の生徒から先生への不信感も生まれやすいため、どこまで特別対応をするのか、どのように他の生徒の不満を解消するのか、をさらに考える必要があると感じた。次に感じたことは生徒との距離感である。どこまで生徒と距離を近づけるかによって、授業や学校生活が円滑に進む場合と逆に悪化させてしまう場合があるとも感じた。生徒と一定の距離を保たなければ、生徒は指導や指示を聞かなくなってしまう。しかし、距離がありすぎると生徒の問題に気づくことができなかつたり、授業やイベントの際に生徒が非協力的になってしまうこともある。そのため、生徒の呼び方や生徒からの呼ばれ方、授業中と休み時間で生徒への接し方を変える等、日々の少しずつの意識を大切にしていける必要があると感じた。

次に教師という職業の大変さについて書く。自分が想像していた以上の忙しさをたった3週間で経験した。まず授業一回の準備にかかる時間の多さに驚いた。教材研究を何度もしたり、ワークシートを作ったり、パワーポイントを作ったり、回収プリントのフィードバックをしたり、としなければならないことが本当に多く、さらにクラスの進度や特徴に合わせて少しずつ授業内容を変えていく必要があることにも大変さを感じた。正直これだけで非常に大変だと感じたが、このことに加えて生徒議会、体育大会の準備、放課後学習会等の放課後にある活動の多さに驚いた。しかし、先ほども書いたように生徒との関わりは大切にしなければならないため疎かにできない部分でもあると感じた。また放課後活動の一つであるクラブ活動も、今回は平日のみのクラブ活動への参加だったが、実際には週末も試合や大会への引率、そもそも担当するクラブに関する知識や技術を身につける時間も必要だと思うとさらに大変になってくると感じた。また授業がない時間には学校の見回りを行ったり、問題が起きたクラスの対応に駆けつけたりと、ここでもしなければならないことの多さに驚かされた。正直、授業がない時間も多く、その間に仕事を大部分終わらせられると思っていたが、今回の実習で絶対に不可能だと感じた。また私の出身中学校では比較的問題行動を起こす生徒は少ないが、そのような生徒が多い学校で働くとなればさらに時間はなくなると先生方にお話いただいた。働き方改革により、少しずつワークライフバランスは確保されてきているとはいえ、正直まだまだだと感じたし、教師は本当に大変な仕事で覚悟を持って働

き始める必要があると感じさせられた。

上記で教師の大変さを記載したが、その分やりがいも非常に大きい仕事だと感じた。なぜならたった三週間の実習で、生徒に大きな影響を与えられたからだ。三週間の中でやりがいを感じる事が何度もあった。普段は授業中に発表、発言を絶対しない生徒が徐々にしてくれるようになったり、普段は授業を聞かない生徒が授業に積極的に取り組み、さらには授業後に質問に来てくれたり、生徒が悩み事を相談してくれたり、生徒の些細な喜びを報告しに来てくれたり、最終日には私のために泣いてくれる生徒もいた。たった三週間だったが、自分の努力がそのまま生徒に良い影響を与える仕事だとわかり、非常にやりがいを感じる事ができた。実際に働くとなれば、年単位での生徒との関係になるのは確かだし、その分さらに大きなやりがいを感じられるのだと考えるだけで、教師という仕事には大変さ以上のやりがいがあると感じた。

今回の実習を経て、本当にたくさんのことに気づいたと同時に、自分の未熟さも痛感した。そのため、やはりすぐに教師にはならず、社会に揉まれてたくさんのことを吸収した上で教師になりたいと感じた。その時に 1 人でも多くの生徒に良い影響を与えられるような教師になりたいと改めて感じさせられる教育実習だった。